

木原武一著「天才の勉強術」新潮社 1994年6月1日刊を読む

## 天才の学び方(6) チャーチル



- ・自分でちゃんと納得したうえでなければ、いかに他人から強制されようともやる気になれない。
- ・少年・少女にとって大切なのは、良い成績よりは意地である。意地とは、自分の考えを押し通そうとする心であって、それは、親や教師に強制されて勉強する従順な心よりもはるかに上を行く心である。そういう心の持ち主はやがて内に秘めた大望を実現する。
- ・チャーチルは、1940年、第2次世界大戦がはじまった翌年にイギリスの首相になったが、ナチス・ドイツの激しい空襲のさなか、学童を前にして「けっして降参するな、けっして降参するな」と演説した。これも小学生以来の意地から出たことばにちがいない。
- ・肝心なのは、心を燃やして何かに集中できるかどうかである。好奇心と興味が集中力を生み、それがものを学ぶ楽しさを導き出すこのことは、学校に入ったばかりの小学生でも生涯学習に励む老人でも、少しも変わりはないはずである。
- ・チャーチルがパブリックスクール時代に興味をもったものに、学校で時々行われる学外の名士による講演がある。歴史や科学などについて、その分野の権威ある人びとがときには幻灯などを使って面白い話をするというもので、彼は熱心に聴いた講演はいつまでもよく覚えていて、それを受け売りするのが得意だった。そのうち5つばかりは30年以上たっても忘れなかったというが、だれにでもこんなことはあるにちがいない。「勉強」とは後のちまで記憶に残ることを獲得することである。
- ・「こういう講演を学校でなぜもっとやらないのかと思う。2週間に1度くらいやり、講演後全生徒に、まず自分たちの聴いたことを書かせ、次に感想を記させたらどうか。そうすれば、先生は、だれが一番よく覚えて、これを消化し、表現できたか、だれが劣っているか、容易に知ることができるだろう。また、全校の学級編成もこれに従ってきめればよかろう」
- ・チャーチルは、1896年の冬満22才になって、軽騎兵第4連隊の一員としてインド滞在中にはじめて「向学心」なるものが生じた。自分自身が多方面にわたる思考の世界において、おぼろげな知識すら持っていないことを感じはじめた。
- ・友人の口から「倫理学」ということばが話されているのを聞いてはたと考える—いったい「倫理学」とは何か？—
- ・彼はパブリックスクールでも陸軍士官学校でもこんなことばは聞いたことはなかったのだ。大学では一般教養として倫理学とはいかなるものか教えられているはずであるが、大学教育を受けていないチャーチルにはそのあたりの知識がそっくり欠落していたのである。
- ・たとえば、カントやショーペンハウアーが話題となったようなときに、その名をはじめて耳にするようでは、エリート意識旺盛なオックスフォードやケンブリッジ出身者から相手にされるはず



がない。

- ・そこでチャーチルは猛然と本を読み始めた。歴史・哲学・経済学など広い分野におそ知識人と言われる人たちの読んでいるような本を送ってくれるように母親に頼み、イギリスからインドへと未来のイギリスの首相の頭脳を育てることになる書籍が海を渡った。
- ・未来の首相は、何よりも大好きなポロ競技の練習のための時間とともに、毎日 4、5 時間の読書の時間を確保し、まずは、父がほとんど暗唱していたギボンの『ローマ帝国衰亡史』を手はじめとして、『プラトン』『アリストテレス』といったものから、『マルサス』『ショーペンハウアー』『ダーウィン』など、知識人といわれる人なら誰でも知っているはずの書物を読みこなし、ともかくも、エリートとよばれるにふさわしい知的基礎体力を身につけることができた。
- ・こうして彼は世界の名著を独学して、つくづくとみずからの知識と教養の不足を実感し、自分のようなケースが手遅れにならないための次のような教育改革の提案を行う。
- ・「16、17 歳になったところで少年・少女たちに手工芸などの何かの技術を習得させ、余暇には詩を読んだり、ダンスをしたり、スポーツをしたりさせる。そして、本当に知識欲が生じたときはじめて大学へ行かせることにする。それも工場なり農場なりですぐれた成績をあげた者やものを学ぶ熱烈な心を持った者だけが大学へ行くことができるようにする」
- ・雄弁術でもっとも肝心なことは、演説の内容を完全に自分の頭の中にたたき込んでこれを明瞭に話すことができるかどうかである。彼のばあい、イギリスにかぎらず多くの欧米の大学で行われているような、どんなテーマでも自由自在に議論できるための訓練を受けたことがなかったの、あらかじめ文章に書いて暗記したものでないと、なにひとつ言うことができなかつたのである。「演説の内容をすっかり暗記して話す」というのが彼の雄弁術の秘訣であった。
- ・下院で行った 3 度目の演説では、6 週間も費やして文章を練り上げ、暗記した。こういう演説の準備そのものが彼にとっては、大切な「勉強」のチャンスでもあった。
- ・チャーチルは、しばしば、名言や名文句を口の中できり返し、それをそっくり、演説の中で引用した。
- ・頭にしっかりと彫りつけられた引用句は人にいい考えを与える。また、その原著書を読もうとか、その他いろいろの欲をおこさせる。
- ・イギリスには「バートレットの引用辞典」というよく知られた辞典があるが、これはチャーチルの重要な愛読書の 1 冊で、ここから大いに借用した。借用する能力も、それはそれでものを学ぶための大切な能力のひとつなのである。
- ・日曜画家の楽しみ、  
彼の政治生命は何度かの浮沈をくり返すが、不遇の時期のなぐさめとなつたのが日曜画家の楽しみであった。人生の最後の時間を託することのできるものを持っているというのはとても心強いことである。そのための「勉強」はできれば早目にしておきたいものだ。

